

〈私〉の生から眺められた環境について  
——風景としての生と環境のなかの他者——

村 瀬 鋼

## 1 基本的な狙い

環境について考えようとするとき、我々は茫漠とした思いに囚われる。一方では、現今、環境を問題にするということは、何か緊急の至上命令でもあるかのようにもみえる。他方では、しかし、環境とは、およそ我々を取り囲む全てがそれでありうるのものであって、そこでは一切の事柄が連関していて、何から考え始めてよいのかわからないし、何を考えても何らかの仕方であいまいに環境を問題にしていることになってしまう。

私は考える。私の視点から環境を眺めてみることに、一つの〈私〉にとっての環境の成り立ちを考えてみることに、糸口になりうるのではないか。私個人の個性的な見方が問題なのではない。むしろ、一つの〈私〉が環境を生きるその一般的な仕方、一般的な形式が問題なのである。これを考えてみることに、幾つかの利点があるだろう。

まず、環境とは、基本的に、或る生きる者を取り巻くものことである。それはいつも、また根本的に、一つの個の生に関わっている。環境を保護する、と言う。だがそれは、誰のどんな生にも関わらぬ客観的实在を保護するというのではなく、その環境のなかで生きる個の生を保護すること、そのためのこととしてしか意味を持ちえない。なるほど、たった一つの個が重要であるわけではなく、沢山の個の生が重要なものではある。だがそれらの沢山のものは、それぞれ一つ一つ、一つの個の一つの生を生きる。「自然の生存権」や「生命中心主義」ということが言われることがある。だが、そこでも本当に問題なのは個の生であるほかはない。一方で、もしこれらの言葉がただ生態系の維持だけに関わっているのだとすれば、そこで真に氣遣われているものは生態系のただなかで生きている一つの個の生だけである。大文字の

生命とも呼べそうな生態系なるものは、実はそれ自体としては誰のどんな生であるわけでもなく、そこで生きる或る個の生の条件になっている一つのシステムでしかない。このシステムが氣遣われるのは、この個の生が氣遣われるからでしかないのである。他方では、もしこれらの言葉が真に生の尊重を言おうとするものであるのだとすれば、根本的に尊重されるべき生とは、無数の一つ一つの生、それぞれが一つの個の生であるような生たちであるほかはない。多様な種の存続というものを考えるとしても、もしそれが私たちであるところの人間の存続のために都合のよい状況の維持を考えることには尽きずに生の尊重としての意味を持つのだとすれば、種の一員として生きているはずの個々の個体の生を顧慮することが根底に置かれているのでなければならない。かくて我々は、環境を、一つの個の生の環境としてしか考えられず、またそう考えられてこそ環境という言葉は実を持つ。ところで我々は、個の生ということを知るところの自分自身が生、一つの〈私〉の生を基準にしてしか理解できない。他人の生、例えば他人の生は、私にとって、もう一つの別の私の生、他人のところの一つの〈私〉の生として生きられているであろうような生である。動物や植物や山の生でさえ、もしそれらが生と呼ばれうるならば、それらもやはり或る種の別の私の生、この私自身の生の変形やそこからの引き算によって理解されるような生であるほかはない。だから、私の視点から環境を眺めてみることは、およそ環境ということが問題になるあらゆる場面で、語られる物事の位置や意味を見定める、一つの基準系を我々に与えてくれると思われる。

次に、私の視点から環境を眺めてみることは、環境について語ったり環境保護や環境破壊を実践したりする我々自身についての根本的反省に我々を導

きうる。我々はなぜ環境を問題にし、なぜ環境保護や環境破壊を云々するのか。そもそもそれは必要なことなのだろうか。もし必要だとすれば、それはどんな意味でなのだろうか。例えば、至上命令であるかのように言われる環境保護ということも、私に予め課せられているものではない。私は生きる。そして生きるということだけが私の全てであり、それ以外には私には何もない。そして、この生はそれ自体としては善悪の彼岸にある。生が許してくれるあらゆるものが私には許されている。環境保護に頓着しない生は悪人の生であるかもしれないが、そんな生もありうるのだし、あってよいし、また実際にある。私に予め課せられている義務があるとすれば、それは生そのものが課す義務、他の何が課せられているわけでもないゆえにこそ私がそうしないわけにはいかない或る事、つまり、よく生きることだけである。例えば、死にかけている老婆としての私は、環境保護を課せられているわけではない。その私はただ、残された、たしかに無くなってはいない生の時を、ただ可能なかぎりよく生きることしかできないし、それでよい。それしかできないし、そうしないわけにはいかない。そして一般に私とは、最後のところでは、この老婆のように、ただ生きて死んでいく者、死ぬまで生きる者、あらゆる営みを通じて結局はただ生きるということだけをして尽きる者でしかないのである。だが、まさに、私がよく生きるために、環境や環境のなかで生きる他者たちを顧慮することが重要になってくるということがありうる。死にかけている老婆でさえ、ただ自分の生にしがみつくのではなくて、生き延びる他者の生のために残りの生を捧げることがありえ、またそれはむしろありふれたことでさえある。こんな私の生の視点から環境を眺めてみることは、環境問題に取り組もうとするような我々にとって、この取り組みの根本的な動機や理由や意味を、幾分かでも教えてくれると思われる。

最後に、私の視点から環境を眺めてみることの遠方には、環境学と哲学との間のありうべき幸福な関係の設立が期待される。様々な現実的な諸問題に取り組む環境学諸論は、それぞれの内部でそれなりの実効性を持つものの、総体を見通す視点をしばしば欠いているように思われる。現実的な問題だけが問題なのだから、それはそれでよいのだと言えるかもしれないが、その場合、環境学なるものは存在せず、ただ生活上の様々な諸問題に技術的に対応していこうとする古くからの我々の営みがあるだけだということになるだろう。そこでもし環境学に基本的な地図を提供しうる視点があるとすれば、それはどんな超越的な視点であるよりも、一つの〈私〉の視点であるように思われる。ところで、〈私〉の視点から全体を了解し直すこと、これは哲学が——それが哲学の全てではないが、少なくともその一面で——従来強力に行なってきたことであった。他方、哲学の方でも、環境学との交わりは一つの貴重な機縁となりうる。哲学の一つの中心的な主題であり続けてきた〈私〉なるものは、実際にはつねにそれを取り巻くものとの関わりの中に置かれていて、このことは、例えば「世界内存在」といった用語で論じられてもきた。環境学は、哲学を、〈私〉の生をそれを取り巻くものの具体的で多様な広がりの中で改めて捉え直すことへと促しうるだろう。

ここでの具体的な内容を先取りしておく。まず、〈私〉への環境の現われである風景を、論者は、かけがえのない現在ということで規定されうる〈私〉の生の内実そのものとして理解する。次に論者は、風景の儂い現在のなかに、持続する時間が編み込まれている仕儀を、物の世界としての環境と〈私〉の身体との関係を鍵にして論じる。最後に論者は、風景のなかに環境の一部として自ずと登場してくる他者の典型としての他人の存在が、本質的に孤独である〈私〉の生に、環境の維持改変や環境問題への取り組みにさえ向かおう

とする大きな動機づけを与えている事情を考える。

## 2 環境の現われとしての風景

私は生きている。私にとって環境とは、私の生存を支えてくれているものである。それは具体的には、衣服や住居や食物、それらの源としての自然物、自然物が生まれもすればそこに私が住居をつくり必要なものを獲得しにもいく土地、その土地の状態を保ってくれる気象や気象を左右する天体の巡り、私とともにあらゆる生物を生かす空気と水、といったものであり、また、私の生きる土地の遠近にいて、私と共働したり私を助けてくれたりする人々、これらの人々がときには私とともにつくった建物や道具、私に或る生活の習慣を強いつつその習慣に従うかぎりでは生存を容易にしてくれるこれらの人々の安定した活動の形式である。これらのものは、私の生存を支えてくれているゆえに、また私の生存を脅かすものでもありうる。自然物のなかには毒や危険物があり、険しく過酷な土地や気象があり、私と敵対し争う人々がいる。

だが、環境は、ただ私の生存に関わるだけではない。それは私の生きられた生そのものに関わるのであり、しかも、たんに生存に関わることによって間接的に生そのものをも左右するというだけではなくて、それ自身が生の中身をつくる。言い換えれば、環境が私の生存を支え、支えられたその生存の内部で私は生を享受する、というだけではなくて、私は環境そのものを享受し、この享受が生の中身そのものをつくる、ということがある。

どのようなことだろうか。生存ということだけを考えるなら、私にとって必要な環境の最終的な内実は物、身体という物に作用して場合によっては身体の一部として同化されて身体の安定した循環的機能を維持してくれる物で

ある。しかし、私の生は盲目的過程に尽きるのではなく、物としての身体の内部に閉じ込められているわけでもない。私はただ環境を被ったり環境に働きかけたりするだけではなくて、環境の現われを持つ。私は環境を、私にとっての環境として私の周りに知覚し、それを私への現われとして享受する。

私が享受する環境の現われを、ここでは風景という言葉で捉えてみたい。風景とは環境の現われのことであるが、基本的に物から成り立つ環境そのものとは厳密に言えば同一ではない。その現われとしての性格を際立たせるために、この言葉を、或る不動の土地に繫留された景観を思わせる *landscape* や *paysage* といった言葉の含意から解放して、むしろ日本語のその語感に相応しい意味合いで理解したい。風景とは、風と光である。物理的実在としてのそれらのことを言いたいのではない。風と光とは、生きている私にそのつどじかに触れにきて、そのときをかぎりに輝き、もはやどうしようもない仕方方で或る現われを——現われとしてのそれ自身を——実現しつつ、この実現と同時に当のものとしては永遠に過ぎ去ってしまう、そのようなものことである。それは物ではなく現われであり、物ではなく出来事である<sup>14</sup>。

風景は、純粋な風景としては、状況と呼ばれるものではない。状況とは、私を行動に促すもの、私の行動によって働き掛けられるのを待つものである。だが風景とは、私の行動に関わらないもの、言わば私がどう為ようもなくただ眺め享受することしかできないものことである。別様に言えば、私の行動は、状況としての環境に働き掛けることはできても、一つの風景それ自身に働き掛けることはできない。それは、私の行動そのものによって風景それ自身が別のものになってしまうからであり、厳密に言えば行動の前と後とで変化を提示する同じ一つの風景というものはありません、風景はそのつど新しいものとしてただ享受されるだけだからである。それは儂いもの、儂いがゆ

えに不可触で不壊のもの、そしてかけがえのないものである。

風景のこういった性格は、風景が現在を構成するものであることを意味している。風景とは、そのつどかけがえのないものとして実現され、その実現を以て尽き、過ぎ去り、更新される、この儂いもの、現在として生きられるかぎりでの或るものである。そして、風景という言葉は、拡張的には現在の全体性に宛てられうる。それは、現在の全体が私に与えられるその仕方である。風景は、それをそのうちに閉じ込める囲いのようなものを持っているわけではない。私のいる部屋のこの窓から眺められる銀杏の樹やその葉叢の間から垣間見える建物の壁ばかりではなく、ここから直接見えるのではないが銀杏の樹の向こうの限りない空間の広がりの中に在ると感じられるあらゆるもの、私が日々行き来する門やその前の往還、馴染んだこの街のあらゆる細部、見知らぬ遠い街や遠くの家や海、地球の裏側や銀河の彼方の物事さえ、それぞれの明確さと曖昧さの程度において、その程度のままに、私にとって——私の肉眼にではなくとも、私のこの現在のなかに——在り、その一切が私の現在の風景を構成している。また、狭い意味での現在に現実存在するものだけではなく、過去や未来の物事も、それらがいまそのようなものと観じられている過去や未来であるかぎりにおいて、風景の一部を、言わば風景自身の或る独特な奥行きを成している。最後に、言わば求心的には、私がいま舌で転がしている飴玉の味、私の心臓の鼓動、いまの私の悲しみでさえ、風景の全体のなかに包まれたものとして、やはり風景の一部であり、またこれらはここにある私の身体という物に特に関係づけられるものでありながら、しかし周囲の風景と映り合い、銀杏の葉の黄色に或る甘さを、部屋の照明に或る鮮やかさを、東京の街に或る悲しい風情を与えもする。

そのつどのあらゆる具体的な細部を伴ったこの現在の全体性としての風景



が、〈私〉の生の中身をつくる。或いはむしろ、それは〈私〉の生そのものである<sup>②</sup>。それは言わば最も私的なもの、〈私〉の同一性以前の〈私〉の私性をつくるものである。というのは、現在の全体としての風景は、同じものとしては二度とは反復不可能なそのかけがえのなさ、この全体の一つであることとによって、〈私〉ということを一いまここにいて、経験されるかぎりの一切を経験している者、としての〈私〉の在ることを——定義するものだからである<sup>③</sup>。

ここで括弧を開いて、〈私〉ということの理解について付言したい。普通、〈私〉と言えば、ひとは心のことを思い浮かべる。そしてそのとき心とは一つの物のように、つまり現在に尽きるのではなくて時間を貫いて持続する同一的な物のように見て取られている。また、ひとはこのとき、心というものを、身体という一つの物のなかに宿っているもの、身体と本質的には区別されていながらも事実上はそれと一体になっているもの、そのようにして身体という物のなかに言わば閉じ込められているものとして思い描いてもいる。このような見立ては、完全に間違った見立てというどころではなく、それなりの理由のある適切な見立てであり、論者自身、後の節ではそれに近い見立てを行なってもいる。だがまず、心が〈私〉であるのは、それがいまここで感じる者であることによってこそであり、現在を生きる者であるかぎりである。心は様々に変様されつつ様々な変様を通じて同一であり続けるもの、様々な変様をそれ自身の歴史として紡ぐものとして理解されているが、そのつど現在のものであるこれら一つ一つの変様を除いた裸の物としての心があるわけではなく、心が心の歴史を包含するものただ現在においてのみである。そして、現在における感じること、これは身体という物の内部に箱のなかのように閉じ込められているわけではない。私は身体の彼方にある青空を感

じ、感じられているかぎりでの青空は私の現在の一部、私の生の一部である。だから心ということの〈私〉としての内実は、身体のうちには個体化されたものであることにあるよりも、現在の感じることの全体としての風景のうちにある。また、心と言ひ、身体と言ふとき、ひとは反復可能な何かを想定している。心と身体は、私がいつも同一のものとして持ち運んでいくもの、同じ在り方を反復するものとして理解されている。まただからこそ、それらは何か一般的で交換可能なものとも理解される。例えば私は、この身体を他人のところに移してみてもそれを他人の心によって生きられているものと想定することもできるし、この心を、場合によっては何らかの表現手段を介して、他人の身体のうちには運搬可能であるもののように考えることもできる。これに対して、現在としての風景は、私が同一のものとしては持ち運ぶことができないうもの、仮に持ち運ぶとしてもそのことがそれを変質させてしまうようなもの、それゆえにかけがえのないものである。風景は私にいつもついてまわりますが、それは私が持ち歩いて人に手渡しもできる絵葉書のようなものではなく、そのつどのかけがえのなさにおいて唯一のもの、反復不可能なものである。私はそれを、いま生きるという仕方ではしか所有できない。或いはむしろ、それは私が何か物のように「持つ」ことができるものではなく、私のそのつどの「在る」ことそのものである<sup>(4)</sup>。だからこそ風景は、私というこのかけがえのない或る者を定義するのである。括弧を閉じる。

立ち戻って言えば、環境のうちでの〈私〉の生きられた生としての風景、これが〈私〉の生の現実的な中身である。そしてそれこそが〈私〉の生の実質の全てである以上、環境との関わりにおいて私にとって問題になるのは、基本的には、また最終的にも、風景の美的価値だけである。だが、翻って、環境とはただ風景として現われるだけのものではなかった。環境は〈私〉の

生存に、たんに〈私〉のいま生きていることだけではなく〈私〉のこれから生き続けていくことに関わり、〈私〉は、つねに新たな風景の美を何がしか意に沿った仕方でも実現するためにも、たんなる現われではない物としての環境と身体とを顧慮しなければならない。しかも、環境内に見出される物は、私にとっての風景の美の実現に役立てられるだけのものであるばかりではない。そのなかの少なくとも或る種のもは、それ自身の生を持ち、それ自身の風景を生きている。論者は次節で、〈私〉の風景のなかに〈私〉の風景に還元されはしない環境が現れてくる仕儀、たんなる現われには尽きない物の世界が〈私〉にとって成立している仕方について考えてみたい。その先で、物のなかに、生きる他者が見出されもする事情、そしてそのことで風景の美的価値に倫理的意味が加わる事情に触れてみたい。

### 3 身体と、物の世界としての環境

重なり合ってもいる風景と環境とを区別して見るならば、風景が心の相関者であるのに対して、環境は身体の相関者である。そしてこのとき、身体は心の宿った身体、心の座とも見なされる身体である。純粹な風景としての風景だけを考えるなら、心の現実性は風景の現実性そのものである。だが、風景のなかに見て取られている物の世界としての環境との関わりにおいては、心はやはり一つの物である身体に固有の場所を持つものとして位置づけられる。

私の身体とは何だろうか。それはまず、諸々の感じる能力と動く能力を貯えたもの、或いはむしろ、私自身と一つになっているこうした諸能力の塊である。能力、という点が肝心である。それはたんに現実性にだけでなく、

可能性に関わる。むろん、現実の発動を伴わなければ能力としての実はないのだし、身体の諸能力は絶えず或る仕方<sup>で</sup>現実<sup>に</sup>発動<sup>されて</sup>いる。私は身体とともにつねに現実<sup>に</sup>今<sup>、</sup>或る仕方<sup>で</sup>感じて<sup>いる</sup>し、動いて<sup>いる</sup>。だが、私の身体の在り方は、このような現在の現実性に尽きるものではない。私は身体で以て未来に向けて何かを為すことができるのであって、このできるということが身体の現在の現実性そのものに孕まれている。但しむろん、できる、というのは、たんなる客体としての身体の可能性ではなくて、〈私〉ができるのである。身体は〈私〉がそこに自分の心の核を感じるその場所である。風景を享受するかぎりでの心は、風景をただ無力に享受するだけであり、そのことをどう為るわけにもいかない。しかし、身体のうちここに——まさにくここ(ろ)として——感じられる心は、それと一体になっている身体を自らの意思の直接的表現として動かすことができ、またたんに身体を動かすというにとどまらず自らの意思自身の向け変えを——自分自身の現在に孕まれている新たな可能的な在り方の何がしか能動的な成就を——行なうこともできる。そしてここで心の変化とは、身体のある世界とは別の何か天空の世界で生じることでなく、いまここで生きられているこの小さな身体の内的状態の変化として感じられる。

私の身体<sup>の</sup>このような在り方は、現在のなかに時間<sup>の</sup>持続<sup>を</sup>齎<sup>す</sup>ものである。私はいま存在し、厳密には現在にしか存在することはできない。しかしいま、私は在り続けていくことができる。私には可能性があり、この可能性が、現在のなかに既に、続いていく私の未来を素描している。そして私は、この可能性の現実の展開を、いま在る〈私〉自身の可能性の展開、この同一の〈私〉の別なる在り方の実現の過程として経験する。ここにあるのはもはや、絶えず更新されては過ぎ去るだけの儂い風景の時間だけではない。そこ

には、続いていく時間、持続する時間、在り続ける同一のものが新たな歴史を紡いでいく時間がある。儂いものがあるだけではなく、持続するものがある。生きられている現在があるだけではなく、生きられうる未来が、但し現在のなかにそれとして素描されてるかぎりである。

加えて、私の身体とはさらに何であろうか。それは傷つきやすいもの、そしてまた養われねばならないものである。それは危険物や毒物や寒暑乾湿によって傷つけられるもの、水と空気と食物を与えられねばならないもの、条件に適うそれなりに安定した環境のなかで環境との一定の関わりを保たれねばならないものである。身体とは、そこで環境が私を襲うその場所、そこで環境が私を支えるその場所、そこで環境が私に直接的実効的に作用するその場所、環境と私との接触点である。私はこの接触点の在り方を、まさに私の身体自身の運動によって調節しなければならない。なかでも私が気遣わねばならないのは、適当な外部環境との適当な関係のもとでは安定した自律的機能を期待してよい内部環境を内に閉じ込めた、身体の外表面である。身体の外表面は、私がそこで外部からの作用を受け取る最前線でもあれば、私がそこにおいて外部の物に接触しながら働きかける最前線でもある。私はそこに危険なものが触れないように振る舞わねばならないし、そこに適切なものを——例えば衣服や食料を——押し当てるよう振る舞わねばならず、しかもそのような振舞いを、そのような外表面に覆われた身体全体を以てしか為しえない。

だから、身体を感じる能力は或る意味では身体外の物にまで伸びていく——例えば視覚は、遠方の物をまさに遠方に知覚する——のだとしても、私は身体を、その外表面としての皮膚に覆われた一つの物として扱わざるをえず、このような触覚的身体の輪郭を私自身である身体の輪郭そのものとして

考慮せざるをえない。そして実は、皮膚に覆われたこの身体とは、そのまままるごと、運動する身体なのにほかならない。私は眼を動かす。それは私に見える風景を変様させる。けれども、そのことによって私は風景の向こうにある物を動かしているわけではないし、動かせはしない。私はただ眼を、手で触知できるこの眼球を動かしただけなのである。遠くから響いてくる音は、私の身体の内側に閉じ込められるわけではない広大な音の風景を私に開く。だが私の聴覚能力は耳のところにあり、音の現われ方に関して、私はただ耳を澄ませたり傾けたりして自分の身体と音源との位置関係を調節できるだけである。そして視覚にしても聴覚にしても、私はそれらの実現を、たんに見えるものや音やのそれ自身の現実性においてだけではなくて、外の物から発せられたこれも或る種の物であるような光なり振動なりが物から私の眼や耳のところにやってきてこれらに接触し、接触によってこれらを触発する、そのようなこととしても理解せざるを得ない。実際また、強烈な光や轟音は、私の眼や耳に痛みを与え、そのとき私は、身体外の何を見、何を聴いているとも言えないほどになる。

かくて、私の身体とは、そこで私の能動と受動とが重なりあう場所、そこで私の能動と受動とが際立った実効性を得る場所なのである。

環境とは、このような私の身体の相関者であり、そのようなものとしてこそ私にその在り方を顕わにする。或いはむしろ、そのようなものとしての在り方を括りだすような仕方で、私の知覚能力が機能する、と言うべきかもしれない。私は一つの物を、例えば机の上の一個のリングを眼で知覚する。このとき恐らく私の純粋な視覚能力そのものは、色の散乱をこんなふう組織立てる必然性を持ってはいないだろう。私はリングという一つの物を机の上に見るのではなくて、私との距離も欠いたたんなる現われとしての色の戯れ

のなかに溺れることもできたであろう。だが私は一つの物を見ている。それは、手で掴めるリング、手で掴んで口元にまで持ち運べるリング、誰かが投げつけたときには私の身体を傷つけるだろうリング、そこから私の眼に光を送っている故にそれと眼との間に衝立を置けば私には見えなくなってしまうだろうリングである。そのリングと私との距離、私の身体との距離は、私がこれから、自らの運動能力を発動して身体を運んでいってリングに接近していける、私の身体の可能的運動の場である。

そしてこのとき、リングとの距離、或いは一般に、私とリングとの周りに広がっている空間全体には、私の身体の可能的運動が展開される時間が読み込まれている。リングの遠さは、私はそれを掴みにいくときの時間の長さのような、未来の遠さであり、また、私が手にしたリングをそこに置いて身を引くときの時間の長さのような、過去の遠さでもある。そしてそこで実際に展開されゆく時間は、私が行動する時間、結果を予想しつつ行動する時間、結果が生じる時間、結果が蓄積されて残っていく時間でもある。私はそれを意図してリングに傷をつけることができ、その傷はこのリングに生じた傷として残っていく。私はその傷を眺めて、取り返しのつかない自分の所業の跡をそこに見るし、そこに露出した果肉の色が変じていくのを自分の所業の帰結として認める。たんに果無いのではない時間、後続の現在が先行の現在の結果として産出される時間、結果を引き継ぎつつ持続していく時間、同一的なものたちの歴史としての時間が、そこにはある。かくて、持続する時間のなかで可能的な行動を現実化していく一つの身体としての私が、この身体と直接的な作用に入りうるやはり持続しつつ変化する物たちと、しかし風景として眺められる現在の空間の広がりの中で、別々のものとして共存している、これが、身体としての私の存在とともに切り出される環境の基本的な在

り方である。

ここで括弧を開いて、環境内の物の多様な諸形態について付言したい。環境のなかに存在している物は、リンゴのような粗大な固体ばかりではもちろんない。液体や気体があるし、さらに、環境ホルモンその他の化学物質のように、微細で普通には知覚できないが私の身体に甚大な影響を与えうると考えられる物質がある。しかし、まず、液体や気体については、それらもやはり、池やコップの中、ビニール袋や掌の中に囲い込めるようなものであって、触覚的身体が運動する空間のなかに場所を画定されうるもの、その場所と身体との接触において身体に働きかけるとともに身体の仕事を受け取りうるものとして、やはり身体の間接者としての基本的な性格を持っている。次に、微細な物については、なるほど通常は眼に見えないとしても、顕微鏡等を用いれば、結局は人間が手で操作する特殊な装置を用いればそれに触れて働きかけもできるような有り様で、やはり身体の間接者として身体によって知覚されるだろうし、また現実的には大抵は、例えば或る種の見えない化学物質に汚染された魚は食べないように遠ざける等、粗大な物の取り扱いを通じて私とそれとの付き合いがなされるのである。括弧を閉じ、立ち戻ろう。

私は私の生それ自身であるところの風景の或る質、美としてこそ価値を持つような或る質の実現に向けて、環境内の物との交渉仕方を調節しなければならないし、また調節することができる。だが、たんに現在の美だけが私にとって問題なのではない。環境を相手取る身体としての私にとって、現在には可能性が、未来が孕まれている。私の身体の現在にその能力の可能的な展開が孕まれているように、目の前に見える一つのリンゴには、それを手に取って見たときの重み、齧ってみたときの歯応え、舌に触れるときの甘酸っぱさ、噛み砕いて嚥下するときの感触、嚥下されたものが私には知覚不可能な



過程を経て私の身体を健やかにするときのその活力、そうした様々な可能性——言うならアフォーダンス——が、まさにそのいま見える姿のなかに感じ取られている。だから、私は、風景の享受において、私のいま生きていることとともに、私の生きうること、生き続けられることを、その不確定ながらも現実的などんなふうにかということとともに感受している。ここで、生き続けられるとは、私がつんにこの身体のうちで独り生存していける、ということではなくて、現在の全体としての風景がそこに擁された無数の物たちの紡ぎ行く歴史の風景として移ろいつつ続いてゆく、ということである。そしてそのこと自身が再び、現在というものの美的価値の一部を成してもいるのであるが、しかしそれは、いまは現実化されていない未来の美を含みながらのことなのである。

ところで、環境内に見て取られる物とは、純然たる物であるのみなのだろうか。いや。物は、心を宿した私の身体の相関者であり、そうである以上、物もまた私の身体のように、何らかの心を宿したもの、そこから風景を生きてもいる私とは別の或るものとして現れてきうる。私は次に、風景のなかに見出される他者の生について考えてみたい。

#### 4 他者の生

私の身体は、私が環境のなかに何らかの物を見出すときの、言わば範型のようなものである。物にさわりかつ物にさわれる表面によって輪郭づけられた一個のものとしての身体は、身体にさわりかつ身体にさわれる表面によって輪郭づけられる一個のものとしての物と全き対を成しており、身体の種類物である。言わば私は、このような触覚的運動的身体を安定した状態に

保つことを前提にして振る舞わねばならないという要請によって、このような身体と対を成すような身体の類似物をその類似性の程度の多少とともに括り出すような仕方での知覚能力の用い方を、自ずと促されるのである。

そして、私の身体が心を宿しており、私の身体が、私にとって、その形が私の心の形でもあるような心の現実性の核である以上、私が環境内に見つけ出す物も、私の類似物として、何らかの心を宿しているものとして現れてこざるを得ない。ただむろん、私の身体に対する類似仕方の程度は様々である。だから、動き吠え顔を持つ犬や猫は、私にとって何か私に極めて似た心の持ち主のように感じられるし、イソギンチャクやバクテリアはそこに心がある可能性を否定できないにしても何か極めて異質な存在のように感じられる。逆に、冷静に考えれば生きているはずもないはずの人形は、そうわかっているにもかかわらず何か心を持っているようで、例えば木切れなら何の罪悪感もなくへし折れる私も、木彫りの人形の腕を引きちぎるときには何か後ろめたさを感じずにはいない。ともあれ、殊更な感情移入や擬人法以前に、私が様々な物のなかに様々な仕方でも心を感じていることは確かだと思われる。例えば自然の生存権といったことが語られる場合、もし我々が様々な生物個々の生を尊重しようとしているのなら、その尊重の基盤は、それぞれの事物内の生の有無についての冷静な分析にあるよりは、私が自分の身体が存在とともに他の物のなかに感じざるをえない漠然とした心の存在の予感の方にあるのであって、むしろ、分析によって実際に確かな基盤が得られるわけでもない。だから、個体の生存権をどこにまで認めるか、蟻一匹やはては天然痘にまで認めるのか、といった議論に関しては、我々自身の頑固でありながら幅のある感受性と相談しながら、結局は殺し殺され食い食われする関係を消すことができない現実の生態系と我々の生活の現実との兼合いを量って、そのつど適当

に折り合いをつけていくほかはあるまい。

立ち戻れば、実際には、私の風景のなかで私と同様に生きている者として感じられるものは極めて多様であり、その多様さが私の風景の豊かさを形成している。だが私はここでこの多様性を問題にせず、専らいわゆる人間であるようなもの、人物の出現について考えたい。それは、一つには、恐らくこれら多様な者たちは、極めて多くの面で私の全き同類と見做しうる者である「人」のヴァリエーションだからであり、また「人」こそが、私にとっては、生きる者としては極めて大きな意味を持つ他者だからである。

人、他人とは、私に類似したものを探す私の視線が、私への類似性の際立ちにおいて目立つ物のうちに自ずと見て取ることになるもののことである。

一面において、他人は、環境内の或る独特な物であるにすぎない、とも言える。それは生態系というシステムの一つの部品、多少とも予想でき多少とも不確実な可能的な振舞いを孕んでいる一つの物である。私は、私の生の専ら美的に問題になる価値の実現に向けて、その物に対応していくことができる。それは、嵐や地震、家畜や猛獣に対して私がそうするのと同じである。

しかし他人にはこれとは別の面がある。他人は私と同様に生きて感じる者、そのような者として風景を持つ者である。私は、自分自身、自分の身体のところ核を持ちつつそのような生を送る者である以上、私と同様の身体を持つ者として現れる他者もまたそのようなものであることを、否定することができない。私は殊更な感情移入によってこの事態に立ち至るわけではない。むしろ、私自身が私の身体において個体化されるというこの事態と同時に、他人は私と同様の資格を持つものとして環境内に出現してくるのである。もし、他人が私と同様の者であることを否定するとしても、それは既に受け入れてしまっていた後で拒絶することではかない。

他人は、私に見える他人の身体のところにいる。他人はその身体で以て行動して周囲の環境に働きかけ、その身体のところでは周囲の環境の作用を被る。その環境は、私がそれに働きかけ働きかけられる私の環境と同じものであり、そこには私自身の身体もが含まれている。そして他人は、ただ他人の身体のところだけにその生を持つのではない。他人もまた私と同じように風景を持つ。それは、私も生き他人も生きているこの同じ環境の現われ、しかし私が持つとは別の現われである。それこそが私の生なのでもある現われとしての風景は、基本的に私的なものである。だが、風景のなかに見て取られる物の世界としての環境は、他人にも開かれたもの、基本的に公共的なものである。環境のなかで、私の風景と他人の風景とが、決して同じものにも同一のものにもならないままに言わば重なり合い、私は私の風景を通じて、その風景のなかの環境に私にとってはたんに永遠に可能的であるだけのものとして孕まれている他人の風景を窺い見る。

ここから語られうることの大半は、或る意味では退屈でありふれた、人間的世界の間主観的な構築の物語である。環境のなかの物が、私にとってそうであるように他人にとっても欲望や享受の対象でありうることを私は知っている。私が環境に対して為す行ないが他人にとって持ちうる意味を、私は不正確にはあれ理解している。私が目の前のリンゴを取って食べてしまうことは、他人を飢えさせることでありうる。逆に、飢えている私は、このリンゴを欲望していることが窺われる他人を前にして、他人に先んじてリンゴを手にとろうと意志しもする。私と他人は一個のリンゴを奪いあい、時には身体をぶつけあって戦う。しかしまた、他人は私にとって、生きていくための有益な援助者、協力者でもありうる。だから私は大抵は他人と折り合いをつけてやっていこうし、遠くの人々とは対立しながらも身近な人々とは協

調するだろう。また私は自分が、身体を持つものとして、他人の風景内に見えていることを知っている。他人が私に注ぐ眼差しは私への評価を含んでおり、許しや非難、見守ることや警戒すること、訴えや要求を告げている。私は他人との関係のなかで安定した生を送るために、他人が私に承認する役割や資格を担って、言語をも含めて既にそこにいた他人たちの生活様式を受け入れて、人々の一員として生きていこう。そこで私は、ことによれば人々とたんに調子を合わせることをも一つの動機として、環境保護と呼ばれる活動に勤しむこともあるだろう。公共的なものである環境の改変や維持に関わるその活動は、私にとって、たんに私の生の未来に関わるだけでなく、他人の生の未来や未来の他人の生に関わるものであるだろう。

だが、再び改めて問うてみたい。一体このような私の営みを動機づけているものは何なのか、私はなぜこんなにも他人を顧慮するのか、私にはなぜ他人がこんなにも気掛かりなのか、と。それはたんに、何がしかの安定した生活を手に入れて、そこで何がしかの自己の生の美を味わうためなのだろうか。私が自然的事物を自然に従いつつ利用し征服するように、他人の持つ力——物理的力や政治的力——を用心しながら利用するためなのだろうか。私はただ、自己の生ゆえに他人の生をも顧慮するのだろうか。恐らくそうではない。むしろ、私にこれらの営みを強いるのは、他人の生そのものの重み、私の生死に関わらず生きるであろう他人の生の、私の生に価値を与えるゆえにではないそれ自体としての価値、しかしやはり私にとっての価値である。

私が生きているのは、或る意味では実際には他人の様々な営みのおかげであろうが、決して他人の生のおかげではない。或る他人が生きていようといまいと、私はいまここで生きているし、或る他人が死んだからといって、私はいまここで生きている。具体的な或る他人を目の前にしてそのことを理解

するのは容易である。想像上ででも他人をその身体ごとこの世界から消してみればよい。私は死にはしないし、生きている。同様に、他人が生きているのは、私の生のおかげではない。今度は私をその身体ごと、想像上で消してみよう。世界はまるごと残り、他人はそこで生きているだろう。言わば私と他人とはそれぞれ勝手に生きているのだし、それぞれ孤独に生きている。私はこのことを、身体として環境とそこに現れる物や他者を相手取って生きる一個の存在としての自分を知るのと同時に、本当は既に知ってもいたのである。

にも拘わらず、私の生とは無縁でありうる他人の生を、私は気にかけずにはいられない<sup>⑩</sup>。それは我が身を思っただけのことではなく、他人のところの一つの生があるから、この私の生と同様の、しかし私にはそれを生きえない、もう一つの別の生があるからである。それは私にとって、決して無ではない何か、貴重な何かである。私が他人の評価を気にするとしても、それは我が身の榮譽のためだけではない。むしろ、他人が私を眺めるときに他人が持っているだろう喜ばしさや羨望そのものが、私にとっては重要なのである。実のところ、私が我が身の榮譽を喜ぶとしても、それは、そんな私の喜びが、例えば私を大切に思う誰かにとって喜ばしいことであると感じられるからでしかない。なるほど、時には私は他人を苦しめ、他人を殺してまでも一つのリングを手に入れようとするだろう。けれどもそれは、他人が一つの生を生きていることに対して比喩的にも実際にも眼をつぶって他人をたんなる物理的障壁のように扱おうとすることではないとしたら、たんに私が或る喜びを享受するためだけではなくて、他人に或る生を生きさせるため、例えば私がリングを得られなかった際に持つだろうような飢えや口惜しさを他人に経験させるため、文字通り「思い知らせてやる」ためでもあるのだ。そして、私が

何かを他人に語りかけ、自分の話に耳を傾けさせようとするのは、他人の評価を期待してである以上に、私がかかけがえのないものとしていま経験している生の質、決して本当には分かち合えないこの質を、どうかして他人が、私とは無記に勝手に生きているその他人が、勝手に生きるその生において経験してくれることを祈るからである。さらにまた、私が他人と調子を合わせて生活することを好むのも、我が身の安寧を謀ってのことである以上に、他人の日常的な生の安定を尊重するから、他人の生を驚かせたり乱したりすることを嫌うからなのである。他人の怒号や叫びは、それがたとえ私に向けられたものでなくとも私を苦しめるし、他人の飢えや苦しみは私に由来せず私の飢えや苦しみに繋がるものでなくとも私を苦しくさせる。私がそれらを見無視して冷静を装うとしても、それは、見てしまった上で無視しているか、さもなくばそのような他人の生を、それ自身一つの生として肯定していることなのである。

人間は自己保存の欲求に駆られた本質的なエゴイストだ、というのは俗説にすぎないと論者は思う。むしろ、陳腐な言葉を恐れずにあえて使えば、人間にとって本質的なのは言わば無償の愛である<sup>(6)</sup>。ひとが他人のために命を投げ出すのはありふれたこと——とは言え、その他人は、ひとが命を捨てて死んだおかげで生き延びるわけではなく、ひとが死ななくとも、為されることさえ為されれば生き延びるのである——だし、ひとが未来に生きる者たちのありうる幸福ゆえに自らの不幸な生涯に満足して死んでいくのも、またありふれたことである。

いま、私の風景のなかに或る他人が現れていて、同じ環境を共有しているとき、私から離れたあそこにその他人が存在していること、これは、他の何のためにでもなく、ただそれだけで、私にとっては何か或ること、何か貴重

なことである。その他人は、私の死後であっても生きていだろう他人として、現在にありながら私にとっては既に未来でもあり、私が誕生前であっても生きていだろう他人として、既に過去でもある。そんな他人の生を、私は、しかしこの現在の風景の広がりの中に、たしかに認める。そこに他人の身体があり、そしてその他人は、私の風景に浮かび出る同じ環境を、いまそこで眺め享受し、享受されたそれを彼自身のいまの生の中身になっている、と私には感じられる。或いはむしろ、そう感じてしまわざるをえない。私とは別の或る者が、しかし私と同様のどうしようもなさでそれ自身の生を生きている者として、私には或る意味では私自身以上にどうしようもない仕方、あそこにいる。私自身以上にどうしようもない、と言うのは、私は私自身のことなら能動的に自ら振舞って直ぐに何がしか変えていけるのに、この私ではない彼は、私にとって、勝手にそうあるがままにあらせておくほかはないからである。例えば、私の苦しみなら、私はそれに耐えればよいのだし、それを直接的に——つまり私の為すことがそのまま私の在ることの変様でもあるような仕方——多少とも変えることをいま始められもする。けれども、我が身ならぬ他人の苦しみ、他人が苦しんでしまっている苦しみを、私はどう耐えようもなく、直に変えることもできない。だからこそそれは或る意味で私自身の苦しみ以上に耐え難く、そこに私のどうしようもない〈悲しみ〉が——他人の苦しみを我が身に兼ねたいと願いつつも果たせぬという悲しみがの——あるのだ。——こんなふうにして、他人のいま在ること、それは、ただそれだけで以て、私にとって重みを有している。環境の保護や破壊を顧慮することを私に動機づけているものの大きな部分、或いはまた「世代間倫理」と呼ばれるものを可能ならば基礎づけもするもの、それは恐らく、このような他人の生そのものの私にとっての重みのなかにある。



そこでやはり相変わらず大切にされているものは、生の、儂い風景の美的価値であるには違いない。だが、独り私のいまの生のそれだけが顧慮されているわけではない。いつもそのつど或る〈私〉の生であるような一つの生があるいたるところで、その生のひとときが輝かしくあること、私の生のみならず、未来の生、他人の生が、そのつどそれが生きられるその現在においてそのようであることが願われているのである。そしてそれでいて、この願いは、まさに私の生である私の風景の現在そのものの中にあるものによって促される願いである。私が他人の傍らで眺める風景には、他人の生の質が、私自身のものではないゆえにそれ自身の現実性においては経験できないその質が、しかし確かに折り込まれている。そして、もし私の傍らに現実の他人が存在していなくとも、私は、自らの小さな身体を以ていまここにいるというこの一事だけで、万人に開かれた環境の中かに他人の言わば或る種の影を認めもするのである。だから、私の生の美、風景の美の中かに、或る倫理的なもの、或いはむしろ倫理一般を基礎づけているような何かがあるのであって、むしろ、私の生のいまとしての風景は、そのような何かを含んでいてこそ、真に美しきもの、佳きものとして享受されるのだと思われる。

このような議論は、あまりに非現実的なきれいごとと思われるに違いない。現実には、私にとっては複数の、むしろ過剰なほどの無数の他人がいて、そこには近い他人、遠い他人、顔の見える他人、見えない他人がおり、性別や年齢や資格や役割や言語や生活様式その他諸々を異にする様々な種類の他人がいる。場所ごと、地域ごとの、しかし相互に不均等に連関しあった地理的また歴史的条件が強いるものがある。そこでは私は、すべての他人を同じようにまた等しく顧慮することを実際にはしていないし、しようとしてもほぼ完全に不可能であろう。それが現実であり、だからこそ問題が生じている。

また他人の重みというものに関しては、別の意味でのそれも存在している。それは物の惰性にも似た或る種の惰性である。人の考え方や生活様式は容易には変わらない。私は私の身一つはどのようにでもできて、他人の身は私の身ではないので、私がたとえどんなに目覚めた人であったとしても、私はただ呼びかけて他人自身の自発性を待つしかできない。このような惰性が、既存の様々なシステムを支え、その重しになっているのである。

恐らく、論者に欠けていること、論者に必要なことは、現実に見られる様々な偏差や振れ、また数や規模の問題を、たんに事実上の問題としてではなく原理的な問題としても議論に組み込んでいくことなのであろう。この企ては、いまの論者の手には余る。けれども、それを認めたとしても、それでも、論者が長く述べてきたような事柄は、環境に関わって生き環境を改変して人為的環境をつくり環境保護に取り組みさえする、そんな我々の活動の基礎にあると考えねばならない、或る当然でごく普通の、その意味でやはり現実の事柄なのである。

#### [註]

- (1) 風景論は巷に豊富なようであるが、実際には風景そのものについての哲学的考察はなかなか見出し難い。ひとは、あれこれの風景の美にただ見とれて語るか(美しい風景を賛美し醜い風景を批判する)、風景または風景概念から読み取られる風景ならぬ事象(生物界の仕組みや歴史的な社会状況や思想または思想史等々)に関心を寄せるかで、風景という事柄そのことの本質には思考が及ばないのである。そのようななかで、「風景」の本質についての豊かな考察としては、特に岩田慶治の一連の風景論(『死をふくむ風景』NHK ブックス、2000年、他)を挙げるべきだろう(岩田の風景論に関しては拙稿「共存の風景」(『成城文藝』第180号、2002年、所収、を参照のこと)。加えて、環境の哲学に具体的に取り組んでいる風景論としては、例えば桑子敏雄のものがあ

る（『環境の哲学』講談社学術文庫、1999年）。ここでは差し当たり、桑子の風景論に関して、ここでの論者の議論との対照点を一点だけ述べておこう。桑子は風景を「履歴」を持つ空間の現われ、つまり本質的に過去を含むものと捉えている（「身体配置へと全感的に出現する履歴空間の相貌」というのが桑子がとりあえず風景に与える定義である（同書 p.50））。だが、論者はここでは、風景の基本的な本質を現在として捉えている。尤も、後に述べるように、風景の現在には言わば〈現在する過去〉が含まれているのだし、風景の現在には時間の持続が読み込まれもするのだが、現在としての風景の本質そのものは歴史性とは疎遠であり、或いはむしろ、その本質は、あらゆる歴史性を無意味にしさえするような或る在り方のなかに求められるべきだと論者は考えている。桑子は長谷川等伯の『松林図』にことよせつつ「空間に出現する風景のなかの時間が、瞬間と季節の持続という対照的な時間のなかで出現する」と述べているが（同書 p.93）、風景における「瞬間」と「持続」との交錯というこの事態への桑子の着目は注目に値する。

- (2) 人生は儂い、とひとは言う。だがそれは、普通そう思われているのとは違って、本当は、ひとは誰でもやがて死んでしまうから、ではない。人生が儂いのは、有限な時間しか生きられないからではなくて、現在が現在とともに過ぎ去ってしまうからなのである。
- (3) 論者はここで、森有正の「経験」の概念——即ち、森の著作で微妙に言葉を換えつつ反復される「経験が〈私〉を定義する」という語り方に含まれているそれ——のことを念頭に置いている。但し、森の「経験」は、端的な現在としてよりも、むしろ、言わばどっしりとした重みを具えた存在した過去の成長ないしは変貌として語られている（その時間性は、ベルクソンの「持続」のそれに非常に近い）。これに対して論者はここでは、儂い（そしてだからこそ不壊でもある）ものとしての〈現在〉を、〈私〉ということの基本的な内実と見ようとしている。けれども再び、後に明らかになるように、論者の考える風景も、過去と無縁なものであるわけではない。森のあまり整理されているとは言えない「経験」概念の内実を、その複雑で豊かな時間性の含意を解きほぐしつつ理解し直す作業が、論者の考えに多くの光を齎してくれるように思われるが、これは今後の課題である。
- (4) 桑子も「風景を所有することはできない」と言う（『環境の哲学』 p.100）。但し桑子がそう言うのは、風景が「わたしの外にあって所有されるものでもなく、わたし自身のうちにあってすでに所有されているものでもない」から、